

【 天気で決めた討入り時 】

歴史上、天気を活用したり天候に恵まれて成功した例は多い。

師走を迎え、恒例の舞台やテレビに登場するのが忠臣蔵。最も有名なのが、赤穂浪士討ち入りだ。

今年は、討ち入り 300 年の記念の年である。

浅野内匠頭の無念の切腹後、内蔵助が討ち入り迄に要した 1 年 9 ヶ月を、プロジェクト管理と気象の面から推測してみた。

まず、江戸の本所は松坂町の時の権力者吉良邸に対して少数で討ち入るには、深夜の奇襲以外に選択肢はない。作戦を成功させるには、夜遅くまで涼む人が多く、夜明けが早い夏では無理で、冬になる。

刃傷事件直後の 1 年間は、幕府の威信をかけた吉良邸の警戒が厳重だ。実行に伴う犠牲が大きく成功の確率は小さく、目標達成は極めて困難である。

また、3 年も 4 年も延期すると、吉良打倒の熱き同士の義憤や集中力を、何よりも志を持続させることは至難だ。

大石内蔵助は主君の仇討ちを、気象条件と部下の人心及びその掌握の限界の 3 点から、昼行灯と言われながら、再三熟慮した。結果、討入りの大プロジェクトの決行日を 2 年目の、真冬の夜明け前に決めたと推測する。

討入り当夜、元禄 12 年 12 月 14 日（現行暦で 1 月 16 日）は、酷寒の最中満月の頃。

異常気象レポートによれば、元禄時代の気候は現在より 1 度近くも低く、討入り前夜までに降り積もった江戸の大雪は、奇襲成功への大きな要因となった。

巷間伝えられている雪は、既に止み、深沈の夜気に冴え渡る「皓皓の月」であったと見る。

農業の場合も、最新の気象情報を活用した中期的な営農戦術が必要である。

(気象情報システム株式会社 高 津 敏)